

HOKKAIDOが「特別な体験を求める旅行者」を迎えるためにすべきこと



加藤 肇子 (かとう けいこ)

一般社団法人北海道開発技術センター参事

道内観光圏の整備事業等に関わり10年。公共交通での移動を基本とし、道内179の自治体の内173に滞在。業務と並行し北海道大学農学研究院・博士課程後期(D3)に在籍。

北海道の現状

平成26年度に北海道を訪れた訪日外国人数は154万人で、来道者人数全体の2.9%に過ぎない。そのうち約82%を台湾、中国、韓国、香港、タイなどアジア圏からの旅行者が占めており、欧米からの来道者は10%に満たない。訪問先も73%が道央にとどまっている。

欧米豪州人が旅に求めるもの

欧米豪州人の観光動機は、カルチャーツーリズムに代表される、「スピリチュアル」、「エキゾチック」、「異文化志向」、「伝統・文化」を体感したいということにある。それに加え、近年は自然の中で暮らし遊ぶ、エコツーリズム・アドベンチャーツーリズムに注目が集まっている。1990年代以降、環境志向のマーケットが年に10%以上の伸び率を示しているという。本物の自然に触れることによって、知的満足度を満たし、リフレッシュできる。“旅によって人生を豊かにする”というのが、彼らの休暇に求める目的なのだ。

オンリーワンのコンテンツ

本物に出会いたいという彼らの期待に応えるコンテンツは何だろう。10年ほど北海道内の観光資源の発掘と磨き上げ、外国人旅行者を迎えるための基盤整備に関わる中で考え続けてきた結果、「アイヌ文化」だと確信した。アイヌ民族は北海道に先住してきた人々でその歴史は1万数千年前の縄文文化に遡り、自然界のあらゆる存在をカムイ(神)として尊ぶ文化はスピリチュアルである。当センターが昨年実施した、海外居住の外国人を対象にしたアンケート調査では、欧米豪州人のアイヌ文化への関心度は30%で、アジア圏回答者の2%に比べ高かった。

昨年春に招致したナショナル・ジオグラフィック^{※1}の関係者は、「アイヌ民族とその文化を育んだ大自然がセットで残っている点、レベルの高いアイヌアートがある点が魅力だ。ぜひ価値がわかる人たちを北海道に連れてきたい」と語った。その言葉を裏付けるように、ナショナル・ジオグラフィックは2016年1月下旬から3月にかけて、日本ツアーの一部として道東(阿寒)道北(旭川)を訪れる5本のツアー催行を決定した。

※1 ナショナル・ジオグラフィック
米国ワシントンD.C.に本部を置く、非営利の科学・教育団体。1888年に会員誌として「ナショナル・ジオグラフィック」を創刊するとともに環境、旅、科学などさまざまな分野の研究・調査プロジェクトを支援している。

同社としての北海道初ツアーが、アイヌ文化を主目的としたものであることは、意義があり非常に誇らしい。

アメリカの旅行代理店幹部を招聘

2015年の7月、エクスペディション・イージー（本社シアトル）のマーケティング部長レズリー・ホルゲートさんをVJ事業^{※2}（国土交通省北海道運輸局）で招聘し、胆振、日高、釧路、根室、オホーツクへ10日間旅をした。同社は主に少人数向けの自然・文化ツアーを企画、販売する旅行社で、旅行商品価格は2週間で100万円ほどである。これは国際航空運賃を除いた日本国内での費用（移動費、宿泊費、ガイド費のみ）である。顧客は知的レベルが高い富裕層が多く、リピーター率が高いという特徴を持つ。今回の来道は2年後の商品開発の下調べという位置付けでもあった。そのため、コーディネーター担当として心がけたのは、①テーマごと地域ごとの一流のガイド、②居心地の良い宿泊先、③素材も作り手も一級品の食、④地元の人との交流の場の確保を基本に、訪問先、体験メニューを組み立てることだった。

レズリーさんが感動したコト、モノ

初来日の彼女は、登別温泉の滝乃屋滞在中、仲居さんや女将との触れ合いに満足していた。料理の説明と共に、レズリーさんが欲する水やお茶を、依頼する前にそっと提供するサービスに驚いていた。登別温泉をガイドと一緒に歩いた時に、温泉には種類が沢山あること、その効能の多様性に興味を示し、自然の中にある足湯に「アメージング！」を連発していた。浦河町では地域の盆踊りに参加し、ヨーヨー釣りや綿あめ、浴衣を着た小さな子供たち、太鼓などを熱心に撮影していた。釧路市博物館では「展示方法が素晴らしい。このエリアに来る人は最初にここで地域を学んでから旅を始めるべきだ」と感想を述べていた。アイヌ民族と一緒に阿寒湖で丸木舟に乗った時や、屈斜路湖畔の宿でアイヌ民族の音楽とダンスを見たときには「ここだけでしか体験できない特別で魅力的なプログラムとして、多くの人に伝えるべきだ」と感動していた。

釧路湿原でつがいのタンチョウヅルを見つけた時

や、知床の森を歩き突然海が見える開けた場所にたどり着いた時には、「家族ともこの感動を共有したいのもう一度来る」と話していた。その他、心に残った場所としては、摩周湖と釧路川、根室の森にあったバード

ウォッチングの専門施設を挙げた。食では、白老牛の炭焼き、釧路での勝手井、岸壁炉端での海鮮バーベキュー、羅臼での寿司、屈斜路湖でのアイヌ料理、根室の宿の施設内で飼う鶏の卵に満足していた。「北海道の食を味わうために世界のグルメは足を運ぶべきだ」とつぶやいた。海産物が素晴らしいのは知っていたが、肉、野菜、パン、チーズやソフトクリームなどの乳製品、多様な酒類などのレベルが予想を超えていたようだ。最終日にワインバーに出かけた時には、「ナイトライフの情報も顧客に伝えたいものの一つです」と教えてくれた。

まとめ

この旅を通して、「専門ガイドと一緒に歩くことで何を見られるのか、何を体験できるのか。誰の説明を聞きながら特別な何をどんな景観の中で食べられるのか」を細かく伝えないと、北海道を選ぶ欧米豪州人の個人旅行者が増えることはないかと再認識した。“今だけここだけ私だけ”の特別なプログラムを季節ごと地域ごとに用意し、優秀なガイドがどこにいるかをWEB上から簡単に探し出せ、申し込め決済できるシステムが必要だ。さらに居心地の良い宿泊施設や、移動の時間をも楽しめる交通機関の充実も急がなくてはならない。「北海道という日本の北にある特別な島」の情報を入手・予約できる多言語対応の“使えるHOKKAIDOポータルサイト”の整備が急がれるのではないだろうか。



弟子屈でアイヌ民族の方が作ったアイヌ刺繍（ししゅう）の半纏（はんてん）を着た

※2 VJ事業（ビジット・ジャパン事業）

2003年から訪日外国人旅行者数を飛躍的に増大させるため、観光庁が推進している。現在では、5大市場（韓国、中国、台湾、米国、香港）に加え、東南アジアをはじめとする新興国の各市場に対し、旅行会社の商品企画担当者による視察や商談会など、効果的な事業展開に努めている。